

株式会社近藤研究所

手書きによる紙ベースの工程管理により作業が複雑化し、非効率になっている ルーティン作業は極力システム化し、作業の見える化や時間短縮を図りたい

株式会社近藤工作所 実証結果【1/4】

企業概要

- 企業名
株式会社近藤工作所（愛知県安城市）
- 社長
近藤 徹生
- 概要
 - 昭和41年創立
 - 愛知県でナンバーワンの鍛造金型をつくる会社を目指し、お客さまのニーズに応え、高品質な商品を提供し続けることで、日本の金型技術を次世代へと継承していく
 - 3軸加工機、マシニング加工機、旋盤加工機を使用して、機械・自動車部品等の加工をおこなっている
 - 従業員数20名



株式会社
近藤工作所



誇れ
モノづくり

デジタル化推進の背景

- 作業工程の管理において、基幹システムと手書きの日報表を組み合わせて管理しており、二度手間な作業の発生や、作業実績の正確な把握ができていない

導入ツール



- 「Excel読み込み」や「ドラッグ&ドロップ」で簡単にシステム構築ができる業務改善ツール
- 顧客管理案件や日報など幅広い用途で使用可能で、リアルタイムでの共有、情報の一元化が可能

個人別の日報入力業務を電子化し、クラウド上で工程管理を一元化 受注してからの作業工程を視える化し、段取りよく作業を進めるための仕組みをつくる

株式会社近藤工作所 実証結果【2/4】

モデル実証を通じて解決を目指した課題

日報報告業務の効率化

- 毎日日報を作成しており、入力に時間がかかることや、集計も個人毎に手作業で行っており、非効率だと感じている

課題解決に向けた取組内容

製造現場の行動管理のクラウド化

- kintoneでクラウド上に報告フォーマットを作成し、スマートフォンで手軽に入力・集計もある程度自動化できることを確認できた

紙の自由度に慣れた現場への定着は簡単ではない 人対人で丁寧に対応する部分とアプリの改善等のテクニカルな部分との両方が必要

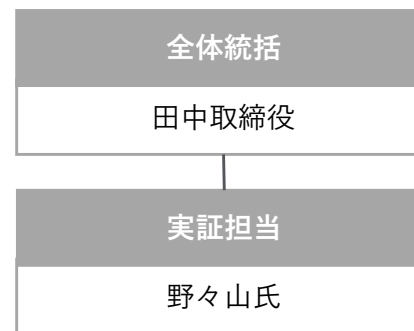
株式会社近藤工作所 実証結果【3/4】

実証時に感じた壁および克服のためのアクション

現場での定着が難しい

- 今まで紙で日報を作成していた時の自由度がなく（複数の内容を枠にとらわれず記載する、追記しにくい、見た目がグラフィカルでなくわかりにくい）、現場試行時に現場でも戸惑いがあった。これについては、データ化して分析することのメリットを説明し記載方法を整理(複数の内容がある場合の入力ルール等)するなどの対応とともに、ツールの機能をより深く理解・活用することによるアプリの改善などで解決していきたい

実証体制



- 田中取締役が全体の方針・実証の環境整備を実施し、野々山氏がツールの試行等実業務を実施した

取組の成果

- kintoneの得手不得手を実証を通じて理解できたため、今後社内のデジタル化を進めるときにどのような形で活用していくのが良いか、具体的にイメージできた

ツールによる日報業務のデジタル化の方向性はある程度見えてきた 今後は予定データとの連携を強化するとともに、結果の分析につなげていきたい

株式会社近藤研究所 実証結果【4/4】

今後の課題・目標

- 日報単体のデジタル化は見えてきたため、作業予定のデータ化および作業予定を一覧表示して確認できる機能などを追加し、予定作成⇒日報入力⇒分析・業務改善のサイクルを回せるようにしていきたい
- あわせて、基幹システムや他の取り組みで対応すべき領域とkintoneを活用してデジタル化を進めていく領域を整理し、IT専門人材が確保しにくい中でも着実に会社業務のデジタル化を進めていきたい

(デジタル化を推進する他企業への) メッセージ

- kintoneのような汎用ツールは、どのように活用するかによって得られる効果が大きく異なってくるが、活用イメージを明確にするのは簡単ではない
- 新しく使うツールなので初めは戸惑うこともあるが、使うほど慣れていくので、まずは使ってみて慣れていくことが重要だと考える